



歌仙聖路の玉川
前篇
四

遠
975
4



遠
號 975
卷 4

本清

復讐言野路の玉川卷之四

滄海堂主人編述



故郷の占夢

玉嶋の畠川上は家へあまると君とやさうも何と云ふはありと。
と詠とるは西濱肥前國松浦の川の變りて其邊と又

すべし玉島の里ともいふ。そも環山力右工門の畠里の産
ましと家への妻ありと佐代とよび一子力藏は今年十四
才なるが幼きより力量つよく身の長も他の童は勝るれば

年七世
永勝
印

天晴成長の後父の跡も續べしと寵愛しと育てりる
 中々うらひ秋春の幾内は連登りて繁花の地の土俵をも
 見せむやと其心がまを成しうも聊時氣の外邪まおろさ
 ま不慮もうちふしれんが又の登里につとてやと母諸も
 家よのこしと出立せしや急故郷の母子が父のたよりを
 待やうも既又幾日と重ねまも浪花よ着し書も来らば
 殊更此ごろ打つてきて夢見さへも宣ふれば母子の只管
 安否を問ふ日毎又便と待侘る折くも附屬ひて登り

沖津浪龜之助歸り来りて今般の騷動の一五十一
 とサ落もろく物ぐるも母子の聞えびと胸ふさぐり正躰あ
 くも打ふと泣より余の事ぞるは龜之助の種よのい
 むぐさめく力とつめ其あがるとい所理るれども今更甲斐
 した事なれば只この上七跡と態は吊ひさむひく敵乃行
 方と尋ね出し仇と返しが追善の供養も孝行も又
 貞義も成ぬれば斤時も早く出立の心がまをとる給
 へと諫め立るお漸くと母子のせれくる涙とよめ是よりと



くもよ
くはれ
ちしよ
ちん



里路の玉川

ツ
ン

住あまし。玉島の家とりづけ。主従門出の吉辰とる。幾内さして登りたる斯く主従二人の山路とたどり海原をころ。幾日と経る浪花の津に着し聊の由縁とりぬ。北野のはらりな侘る家とり。母の着さ時さひ覚へ。琴三味線の一曲とゆり邊の女子よとせよりの便と。力蔵の師匠と頼とて角力の稽古と見さしぬ。沖津浪の前髪と剃る奴あまふ河さる諸國往來の飛脚のこころよ姿。く敵の手ぐやと有次第力蔵と伴い首尾よ

く敵と討びしと母子よ志むしの別とつげ。何方とる。出行り。是の偕とれ山右衛門が子分る。闇雲の九良蔵の親分の頼ふより。越中の國多枯島より。山右衛門の妹お熊が家より。如くこのすて微細より。悪徒の同胞とくこの駭る面色もろく。九郎蔵が詞よまごひ打捨とくも中よ惜るる住居るれ直り身のまろりの支度とくこの夜よまごまごく。秋里と脱出美濃路の方へ赴きり。抑お熊とつるの既よ今申批

野路の玉川四

三

五才よおよぶども未だ定まらざる夫より原来生質慳貪よ
 して若年より父母を孝とつとて夫は貞義と立るの道と
 び此方彼方の男は密通し邪見の事のみあはるゆへ終
 りの衆人は疎まれ寄つて者もあはざれば世間せましくも暮
 りる折り九郎藏の来りしを渉り舟を得しころ
 ら二人連りて多枯島と立のとき美濃路の方へ趣しが
 つつ此九郎藏とつらるれ中とつりて夫婦の契り
 結びたる原九郎藏の越前三國の生をて料理屋の一子

あるが十八九才の頃までい篤實な家なつりて料理事を
 専らに親の手づけけりあつたが不圖二十の年より博
 奕の勝負にまぐも悪友のまに附あひて家なぬるてあ
 頃身持よりいざるゆへ恩愛の親も忌みしめて勘当せ
 らる終に博奕場の魁漢なる浮洲の山右衛門が子分と
 ありて斯る悪漢とい成をてつりつりとも幸ひて廿二才
 よりお熊とい九十三ぶくりも若りもいも饑いもいも
 味もいも品もいも常言の風も眉目もよくぬ老女

房と推乃て此方より一年彼方より半年青楼料理屋に傭ま
 お熊も中居婢女の業をたし聊の賃錢をのりつけ其日と
 送つるが夫婦とも只八管酒とこの飲るは僅の日傭
 賃ののりつけ酒の價は足らぬれば夫婦謀りて物
 と盗り借ての返れごととせざれば同所より長く住事するが
 一年毎に住居を轉つるが待といふは明け来て速
 くも五年の春秋をおくまたり既に美濃近江の繁花は
 大うまに住つてせうく最早岩右衛門は別をてより既

五とせも立ぬまば京浪花は出たりとも知りれも有ま
 くれは幾内の繁花は行く高給銀も取べしと心を決
 便るれば大津の駅より親分岩右衛門が有所とも問
 ぐると彼札の過るる子四郎と尋ねて行く岩右衛門の住処
 と間より幸ひるるや三年さだの冬は頃より此里より
 轎夫とるるのりしが次第は仲間の負もよくるる
 其上この所の遊所なる柴屋町の棒頭の何某がど
 老く勤ぐると宜相続の人もがあと豫くさるり噂を聞て



只管またのこも首尾よく其跡をひくひく今朝夕
 何くくづくに殊に仲間の魁首とありて越中の岩右
 門とよづと喧嘩の挨拶仲間の接事宮の祭礼寺の
 開帳何まされ岩右門と頼まらるりて所の立者
 ありとて語ると聞くと二人の大に悦び炎天は雨を得
 心地の直に住家と間て尋ね行は折よく岩右門
 も家より出て二人を見るあり絶く久しと面會を悦
 び無事と祝つ打り過ここの後や前よりぬ

事の語をいひぬ

○靈場の夕顔

斯く九郎藏お熊の二人の暫く岩右門が方同居
 せしが。そしても隣家の人うけあは。只何とあく面白く
 され。岩右門は談らひ浪花の津に至り。働比度
 う。とつあ。岩右門も尤う。美引。且那。此乃青
 楼。い。て。如此。の。よ。と。語。る。幸。ひ。浪。花。の。三。津。の
 泊。遊。女。町。る。阪。松。屋。何。某。と。の。る。青。楼。料。理。人。の。は

聞およぶ彼所は書面と附べしと聞ふふ山石右
 工門の只管ふたのて直は書面と認めし夫婦のゆは
 是とて此由と言合ふ二人の大は悦び頃三月下旬浪
 花とて趣さる其翌日浪花の津は着し三津の泊り
 遊女町に至り阪松屋と尋ひ行くと書面とて出ひ
 主人は是とひききつ微細は羨引つ先當分の二人とも
 奉公ぶんとて勸其中るも重り互は永く有る
 思ふ近きはとりて家とて得るべしこれ男の料理

方と勤め女房の仲居とるり坐敷の郷食應と弟といへ
 くて甚般は聞ゆる二人とも是をよき善主人
 有つとて夫よりとて此阪松屋は夫婦のりとも奉
 公とてしつる九郎藏の其聞へ悪さげありとて九郎と更
 め料理場とてけとり勤める是は偕とて沖津浪亀之助
 の諸所方とて遍歴し山石工門が有所と尋ねるとも
 未だ時節到来せざるや手がとる人も有るよ速五と
 せとて一週とて心とてむるとも扇方とて浪花

ようア。北野るる母子はあひ。詮るは線ごとと語ア。無念
 のたがごとくおしるるを所理るり力蔵のまを二十八は成
 専る角力の術と鍛練し師匠より名と貫ひうけ。金
 剛力蔵とぞ名のり。既は年月と重なる成長といふも
 未だ敵は有所も分らん又自ら尋ひんも敵乃面体
 ろるがれば是も思ふは任せびし無念の月日とわくまらる
 が此年来おりく都は登ア父の具員の由縁とりとも
 室町るる西川屋よつまるる主人禮二郎ハ父環山の無二の

具員のことるれば以前りかまらば力蔵と大は愛し金銀
 の入用あは遠慮なく言越へて其具員父は異あ
 ざりしる母子は此主人の助けより朝夕の起臥と安ん
 常は高恩とよろこびり然るに今年五月の下旬あり。
 禮二郎ハ浪花の津と見物と下ア三津の濱の辺りは旅
 宿し名所旧跡と尋ねて樂しむる也。金剛力蔵ハ供は系
 了く身辺と放まひ大切とくつとるが坊頭ありして三
 津の泊りの遊女町るる阪松屋と云青樓は遊び坊とよ

秋

とよき園

力蔵

秋のの
てのちで
とくつてして
糸のちかけ
せねばるゝぬ

礼三良



ふんでもたのめのもんを
さうのちとて
うんぬ



八重巻

こくの
ねりのの
らもふん
さうそんで
うたのよてで
おま

てね
ひん
ひん
おま

名々る奇妓とゆゆ折く酒宴と催されぬ然るに多る奇
 妓中よ於く八重花とよぶるゆいよ叶ひ秋所よ至る毎に
 必ひ呼く遊づれりる也力藏も八重花を親しく共よ具負と
 ありよる儲又ゆ日沖津浪亀之助の味原猪飼津の邊
 又用ゆり未明より北野と立出彼処の用向ととのひ果
 二津の濱邊と通て帰らんとするが不慮も三津寺
 の門前よ出る便宜よ任せまふ人の恐もゆきども秋
 所よ来りこそ又幸ひるれば觀世音よ詣でるやと山内よ

へて觀音堂の靈前よ頓首何とと敵の行方と知つて便
 了を得させぬ久しく祈念しやがて門外へ出ん
 とありよ前刻より茶店の床よ憩ひたる二人の奇妓ゆそ
 がささく走り来りて實其後の打て久しくも會まつ
 せむ恠いあり玉ひーやと朝夕案ト系せしと懸詞とか
 らる又龜之助の不審さ其面相とより見まはれ女貌ハ
 かつまども是則ち別人なり先年師環山のふる危さ
 難とさくつま二人の娘さるは是の珍と打おどろさ

互たがひお無ぶ事じ此こゝ問と答こたへも立たぶらぐらうと甚しせいらればお姉あねのあ哥うた妓こ
 いこ龜かめ之の助すけもむうひ何なん角かくとい言いあげたら妻つまも山くよおりせども
 此こゝ所ところへ参詣ぎのひ人ひと繁さかくと悪わるくれば我家わがへ来りまりれくらうと
 より程も遠くないと卒つひと伴ひまりせんといふは龜之の助すけも強
 ちふ家い路ぢも歸るを急いそぐのひ又よきと半がらいはる有りやせん
 と二個ごの詞も随ひく伴ともとてど彼所そこも至りぬ

復くわ雙すう言ごん野の路ろの玉川たまがわ卷まきの四終はつしゆう

